

立教大学史学会大会特集報告

「日本近世の生業・暮らしと文化的景観」

趣旨説明

近年では文化財の一つとして、地域における人びとの生活や生業、あるいは自然との相互作用によって形成された景観を「文化的景観」として重視し、その保全を図ろうとする動きがある。単なる自然景観ではなく、人間の活動によって形成された景観を文化的景観と呼ぶなら、それは複数の時代の長期にわたる歴史的経緯が積層して形成されたものであり、地域社会における人びとの活動、あるいは政治的・経済的動向、地域における社会的権力が及ぼす影響などがさまざまに反映されたものと捉えることができる。そもそも文化的景観というものは、人びとがそこに住み、生活を続けていこうとする意志があるからこそ、維持され

史苑（第八四卷第二号）

うるのである。その土地での生活を放棄すれば、これまでの景観は自然に飲み込まれてしまうであろう。

さまざまな建築物、道路、耕地、山林、河海などを含む文化的景観は、歴史上、何度も作り直され、塗り替えられてきた。なかでも日本近世という時代は、戦争が終結した平和な大開発の時代であり、旧来の自然景観を大きく改造していく時代であった。その過程で生産力や流通のありようが飛躍的に向上し、全国的に城下町や湊町、在郷町などが整備されることで、都市の暮らしが形成されると同時に、兵農分離に伴って村落社会のありようが再編された。村落社会では自然環境に対応して、農業・林業・漁業といった

後藤雅知

多様な生業・暮らしが選択され、あるいは適宜組み合わせられて、地域社会の独自性が生まれることになった。こうした地域ごとの独特の文化的景観が形成されていった。

日本近世社会に生まれた、こうした町と村が織りなす社会構造は、今日の地域社会存立の基層となっており、現在に至る文化的景観の形成に大きな影響を与えていると考えられる。そこで今回の史学会大会シンポジウムでは、日本近世という時代を中心に、米作地帯、山間村落、水辺集落、湊町などの特徴的な場を具体的に取り上げて、生活・生業の変容と景観形成あるいはその変容との関係の諸相を明らかにすることを目指したい。

そのためにここでは以下のような四本の報告を用意した。武井弘一氏「砺波平野の老農宮永正運の嘆き」では、水田の開発が地域にもたらした負の側面を、宮永正運という農学者の見解を通して検討する。近世といえば稲作が重視され、一帯が水田化された景観が広がる地域が多かったと考えられるが、極限まで進んだ水田の開発が、山崩れや河川による水害をもたらす原因ともなったことを明らかにする。

桐生海正氏「近世山間村落の景観と生業」では、相模国の山間村落を題材にして、富士山の宝永噴火という災害による壊滅的な被害からの復興過程を検討する。文字史料の

みならず多数の絵図史料を駆使して、山間村落が複数の生業を組み合わせながら復興していく様子を景観変容とともに明らかにする。

東幸代氏「琵琶湖の暮らしと文化的景観」は、ヨシ原が広がる琵琶湖岸の景観変容について論じる。ヨシが広がる湖岸の、近世から近代における利用形態や、彦根藩主導でヨシ地を利用して実施された新田開発の過程を明らかにして、景観変容の意味を検討する。

中尾俊介氏「小都市神奈川の生業と景観」では、近世から宿場として栄えた神奈川宿の変化を幕末期を中心に検討する。横浜開港というインパクトを受けて急速に都市化していく過程で、旧来からの山や海の利用にも変化が生じるなど、人びとの生業や暮らしとともに景観も変容していく様子を明らかにする。

いずれも個別の事例を詳細に検討したケーススタディとして貴重な報告であり、地域に暮らし人びとの生業・暮らしが景観のありようといかに密接に関わったのか考察していく重要な素材となっている。それぞれの事例からみえてくる共通点や相違点にも注目していただきたい。今回は取り上げることができなかったが、村でありながら流通の拠点などとして形成される在郷町、あるいは城下町や巨大都市である三都が周辺農村へとその領域を拡大していく過程

など、景観変容は、今回取り上げた四報告以外にもさまざま
まな事例が検討対象となるものと考えられる。今回のテー
マは、今後、論点がさまざまに派生していく可能性が高く、
議論を深めることができればと考えている。

(本学文学部教授)